

手にもちたるせきだはきかへ廬路入すべし。

一廬路の石の外の土をふむ事一切悪し、石によりてすべる事有、石の真中とくくふむべし、爰かしこ見物する時は、立留りて見べし、あるく時はあしもとに心をつけべし。

一廬路へ入て聲のたかき事いや也、又餘さ、やき參るもいやなり、常の言をそろくとひきく申なり。

一朝夜ふかならば行燈もちて出べし、その行燈を持て道を見て行也、夜會の時も同前也、行燈もつ事は、大略わかき者の役也、後に座敷の上り口、刀かけの見ゆるやうに、ろくにゆがまぬやうに、手燭同前なり。

一雪隠の内をかならず見る事也、但いつもさいく出合ふ間には、めんく主次第たるべし、一晝會夕會、又跡見などは、かならず手水をつかひて座敷へ入べし。

〔南方録拾遺一〕宗易茶に參られば、必手水鉢の水を自身手桶にてはこび入らる、ほどに、子細とひ候へば、易のいわく、露地向ひ向はる、人たがひに世塵のけがれをす、ぐ爲の手水鉢也、寒中には其寒をいとわす、汲はこび、暑氣には清涼を催し、ともに皆馳走の一ツ也、いつ入たりとも、玄れぬ水こ、ろよからず、客の目の前にて、いかにもいさ清く入てよし、但宗及の手水鉢の如く、腰掛につきてあらば、客來前考て入べし、常の如く露地の中にあるか、玄關ひさしにつきてあるは、腰掛に客入て後、亭主水をはこび入べし、夫故にこそ、紹鷗已來、手水鉢の水ためは、小桶一ツの水にて、ぞろりとこぼる、ほどの大きに切たるがよきと申也と被答。

〔南方録二〕客手水遣ひ様の事

客初の所作に手水をつかふ事、是露地第一の法式也、看板にも記すごとく、心頭をす、ぐを以て